

エコールをもとめて

永津 禎 二

沖繩に住んで四年になる。この四年間は私にとって様々な刺激の連続であった。今回この機関誌に、自分自身の仕事と現代美術の接点を記して欲しいと依頼された。この四年間に自らの中に培ってきた事がらを記すことで表わしたい。

愛知県に生まれた私は、当地に赴任して来るまで他の土地には住んだことがなかった。この沖繩には旅したこともなく、まったく見当もつかないまま飛び込んだことになる。私の作品はどちらかと言えば北方系のものではないかと自分勝手に思っていたので、この亜熱帯地域で作品を作りつづけることができるのか、どんな風に変わってしまうのか、大変不安だった。それでも決心したのは、学生講師と合わせて九年間も同じ大学に居つづけ制作する者としての感性が鈍くなってきているのではとの不安が大きかったからだと思う。八二年の三月にはじめての個展を東京の銀座スルガ画廊で開き、すぐ当地に来て四月から琉大の教官としての生活が始まった。

こちらに来る前に東京で個展ができたのは幸運だった。この個展によって仕事の方向がかなりはつきり見えてきた。そして

- 8 -

その時の状態が不安定であったことも。また以前にコンクール展等で知りあっていた作家がより良い友人となり、同世代の作家の幅の広い交流をもつきっかけになった。これは後のスペース・ニキでの月次展に、そして今年一月のセントラル'86展へと広がっている。自分の世界の中でのものを作っていただけの私が、他とのかかわりを考えるきっかけになった。そして一見いたってこのかかわりを維持しにくい沖繩にやつて来た。

前述のグループ展は私にとつて、ある距離をおきながらかかわりを考える、良い刺激の場となった。公募展とは違った、一つの共通項をもった種々の作品の中に自分の作品を置くことで得るものが多かった。セントラル'86展は種々のコンクール、公募展等で活躍している三〇才代を中心にした三〇人程のグループ展で、相当レベルの高いものであった。しかし不満が残る。それはきびしく考えれば作家の意識の問題だ。既成の価値観への追従でしかないためなのか。八三年に招待されて出品したセントラル油絵大賞展にしても、作品のほとんどが具象系であったが、イラストレーションにしか見えてこない。イラストレーションと絵画を区分すること自体、論議を呼ぶことだろうが、あえて私は分けて考えたい。強い造形性を感じないのだ。——絵画の空間性をもつと信じてよいのではないか。絵画の働きかけをもつと純粹に信じてよいのではないかと思うのだ。

沖繩に住んでみて、北方志向（と勝手に思い込んでいただけだが）の人間が亜熱帯で制作できるかという不安はなくなった。常夏の島というような、上すべりなイメージの浅薄さを恥じながら、私の自然観は私の作品の骨格となるべきものになった。何よりもこの自然に根ざした、すぐれた精神文化が存在し現在

なお色濃く残っていることに喜びを感じた。沖繩各地に点在する御嶽がそれである。もともと私はイコンのような宗教絵画の強い精神性にひかれていた。仏教美術、神道美術にもひかれる。特に那智滝園などは日本の絵画の最高峰の一つだと思ふ。あるいはマンガラの装飾性とそれだけに終わらない精神世界の広がり、深さ。東寺の十二天像の洗練された色調、文様と形態のハーモニー、西大寺の十二天像の素朴な暖かみのある力強い表現……数えあげたらきりが無い。その教義性、宗教内容には無頓着な私は、原始的な自然崇拜の中に自らの表現の可能性をみたのである。

ところが私に多大なインスピレーションを与えてくれる自然が急速に懐かれていく。実生活に最も密着した御嶽をもつ宮古島でさえ最近、史跡の看板とともに周辺の整備が整い観光化する。いったい御嶽とは何なのか。その拝する限定された場所だけが意味があるのか。部落をつつむその周辺全体、森全体の環境そのものが重要なのだ。森を歩くと背筋に電気が流れるような感覚を覚えることがある。あたりを見まわすと必ず拝所がある。産業振興の名のもとに自動車道を通すために山が切られる。御嶽の部分避けて通つても、この自然の体系は大きく崩れ意味をなさない。この異常なまでの開発のスピードは何なのか。

都市に住む者が今、自然をノスタルジックに考える時ではない。もつと文化的産物としての自然を考える時だ。どのような文化があったのか。それは我々が本当に生きるために必要なものではないのか。

その意味において、自然とのかかわりを前面に押し出し、いかに問題視していくかという芸術は、最も緊張を強いられる。

- 9 -

現代美術では、テクノロジーを前面に出す傾向のものに対して正反対ともとれる一つの重要な方向である。特に私と同世代、あるいはもつと若い世代の関心は深いものがある。身近なところでは、私のみてきた四年間に琉大を卒業していった人たちの中にも、この傾向のはつきりした人が何名もいる。それはタブローの形をとるものもあれば、より「物」それ自体の存在を問うものまで形はさまざまである。

自然とのかかわりを考えることは、いきおい、自然にある「物」をそのまま表現手段、素材として用いることとなる。しかし表現とはそのように簡単なものであろうかとの自問もまた生まれる。たしかに、デイヴィッド・ナッシュのエスプリのきいた木の仕事や、ミッシェル・スチュアートの紙と土を根源的な素材として存在を考えさせる仕事のように、生活全体の自然とのかかわりから作品化しているものは率直に感動できる。しかし東京などで今おこなわれているインスタレーション的作品の何とお手軽なことか、実感のないことか。やはりこれも既成の価値観への追従でしかない。興味をもつことはほとんど行なうべきである。どんな実験するべきである。しかしその検証を自らの中に持たなくてはいけない。これは人に問うことではない。私はこだわりのもつて平面の中で追求していきたい。

こちらに来た時の夢が一つある。もちろん私の作品（存在）が受け入れてもらえるという前提があるのだが。突出した芸術の現われる基盤——エコールの成立という夢である。同世代の仲間と一つの基盤となる、連帯が可能かということである。それはさまざまな方向をみながら、ある時代性ということでも共通点をもつような。

私のこれまでのグループでの活動はこの考えに基づいている。一年半前に沖繩で催した「方の会」。今秋名古屋の Space to Stage という画廊で開く予定の沖繩シリーズ四回の連続個展——これは昨年名古屋で催した「方の会」のゲストメンバーからの誘いで実現することになった。そして、共同企画による画廊の運営——十数名の絵画、彫刻、陶芸、染織、映像、音楽、評論等各分野の作家と作家をとりまく人々が共同で企画運営する画廊として、画廊「匠」が五月に新しい形でオープンする。今、その準備が着々と進んでいる。私にとつて、このようなエコールの夢をより具体的に秘めた画廊は、かつてなかった。第一回は昨年夏から琉大の教養部に赴任した丸山映氏の石を中心にした彫刻の個展である。画廊のあり方とともに、作品が沖繩に強いインパクトを与えるものと信じている。

今、芸術はもつと足もとを見つめる時期である。これまで培ってきた文化を再吟味しながら、生き残る方向を考える時期である。作家自ら芸術の機能を軽んずるべきでない。その力を純粹に信じるべきである。

(琉球大学美術講師)

- 10 -